

平成28年10月6日

中央教育審議会初等中等教育分科会
教育課程部会教育課程企画特別部会
主査 無藤 隆 殿

日本私立小学校連合会 会長 小泉清裕

次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめに係る意見等

「次期学習指導要領等に向けた審議のまとめ」を拝読し、さまざまな点で新しい教育の推進を感じ取れる充実した内容であると感じました。その上で、さらにより理解しやすい内容にすることを前提として、本会の役員の感想、意見、依頼などを以下に列挙する。

記

1. 「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」のことばの提示は大変わかりやすい。その上で、これらの三つをどのように関連づけたらよいか、さらにわかりやすい説明の提示があると、目標への迫り方がより明確になる。

2. 「深い学び」が語られているが、「深い学び」を理解する上で、対応するものとして「浅い学び」というものが考えられる。「浅い学び」の定義の裏側が「深い学び」となると考えられる。「深い学び」と「浅い学び」の違いを明確にする科学的知見の検討が求められる。「深い学び」を測る基準の提示がほしい。

3. 「アクティブ・ラーニング」「カリキュラム・マネジメント」「プログラミング教育」「PDCA サイクル」「キャリア・パスポート」など、抽象的で文化的背景をもたない片仮名文字で教育の要点が語られている点が気になる。言葉だけが独り歩きし、厳密に何を意味しているか明確でない。また、本来は企業などの生産管理などの場で使用されている表現を、そのまま教育の場で使用することについて違和感がある。少なくとも、抽象的な片仮名文字や英語の頭文字は、しっかりとした説明とともに使用してほしい。

4. さまざまな箇所、あまりに「アクティブ・ラーニング」という言葉が氾濫しすぎている。一過性の言葉となりがねない点も考慮して、具体的な例をあげてこの言葉を説明することが必要であると考える。

5. 新しい考えや方法を提示する場合、今までの考え方や方法との関係を明確にし、何をどのように実施するか、現場の教員にわかりやすい説明がほしい。今までのものを堅持し、その上で新しいものを入れていくのであれば、現場の教員の仕事量が増えたり、双方を活かそうとしたりすることで教育現場の混乱が予測できる。

6. 外国語教育において、「聞く」「話す」「読む」「書く」の「すべての領域をバランスよく育む」となっているが、言語活動における原点は十分に聞くことであり、「聞く」活動の十分な体験が他の3領域の進展につながると考える。そのため、「バランス」の取り方については十分な配慮が必要である。

7. 私立学校における道徳教育は、創立の意義そのものが道徳教育として考えられる点を考慮して、私立学校への特別な配慮について、何らかの形で明示してほしい。

以上